

東北大学の入学者選抜における男女差の様相

——選抜区分に着目して——

宮本 友弘, 林 如玉, 久保 沙織, 倉元 直樹, 長濱 裕幸 (東北大学)

本研究では、東北大学の入学者選抜に関する各種資料を男女差の観点からあらためて分析し、既存の選抜区分が女子比率に寄与しているのか、「女子枠」のような新たな選抜区分の導入が必要なのかを検討した。志願者及び合格者における女子比率は緩やかに増加しており、とくに総合型選抜（AOⅡ,Ⅲ）が寄与していた。また、選抜区分にかかわらず女子は男子より入学後の成績が良好で、優秀な女子学生が確保されている可能性や、対面オープンキャンパスへの参加が入学した学部等の志望決定の促進要因になることが示唆された。以上から、女子比率を高めるには現行の選抜制度や広報活動の改善が重要であり、新たな選抜区分の導入は急務ではないと考えられる。

キーワード：選抜区分, 女子比率, 男女差, 志望動機, 入学後の成績

1 問題と目的

現在、日本国内での 4 年制大学進学率は、男女ともに 50%を超え、両者は拮抗しつつある。しかしながら、いわゆる「難関大学」と称される大学、とくに理系分野では女子学生の割合（以下、女子比率）が低いことが課題とされている。そして、大学入学者選抜においては、その解決に向けた取り組みが求められている。

例えば、毎年、文部科学省から通知される「大学入学者選抜実施要項」においては、令和 5 年度（文部科学省, 2022 年 6 月 3 日）から、「第3 入試方法」に「(5) 多様な背景を持った者を対象とする選抜」という項目が追加された。そこでは、「家庭環境, 居住地域, 国籍, 性別等の要因により進学機会の確保に困難があると認められる者その他各大学において入学者の多様性を確保する観点から対象になると考える者（例えば、理工系分野における女子等）を対象として、入学志願者の努力のプロセス, 意欲, 目的意識等を重視し、評価・判定する入試方法」とある。趣旨は入学者の多様性の確保ということであるが、「理工系分野における女子」と例示されているところに、上記した課題解決に強く動機づけられていることがうかがえる。こうした方針を受け、いくつかの大学ではいち早く、女子だけが受験できる、いわゆる「女子枠」という選抜区分を設置する動きをみせている。

東北大学においても、女子比率を高めることは重要な課題である。しかし、第一義的には、研究者の多様性を高め、男女共同・協働を実現すること、その一環として女性研究者の支援や採用促進することが目標となっている(東北大学, 2022)。東北大学は、建学の

理念に「門戸開放」を掲げ、1913 年には帝国大学として初めて 3 人の女性に入学を許可した歴史を持つ。このような背景から、女性研究者を尊重する校風が形成されており、女性研究者を支援する環境整備に常に取り組んできた。一方で、女子比率を高める取り組みについては、その重要性が認識されているものの、詳細なデータ分析や「女子枠」のような新たな選抜区分の設計に関する具体的な議論には至っていない。

大学入試に関して男女差を扱った研究では、志願者や入学者を対象に志望時期や理由、情報収集活動などを調査し、男女差を比較するものが多い（例えば、北澤ほか, 2012; 藤井, 2017 など）。これらの研究結果は入試制度の改善よりも入試広報活動への活用に主眼が置かれてきた。筆者らの研究（宮本ほか, 2022）でも同様に、女子が本学を志望するにあたって対面オープンキャンパスの影響が大きいことや、受験決定の際に保護者や進路指導の先生の意見を重視する割合が男子学生よりも高いこと等を明らかにした。

以上の通り、東北大学において女子比率を高めるために、「女子枠」のような新たな選抜区分の導入を検討するうえで必要な知見が、十分に蓄積されているとはいえない。そこで、本研究では、東北大学の入学者選抜に関する各種資料を、男女差の観点からあらためて分析し、既存の選抜区分が女子比率にどのように寄与しているのかを探り、その妥当性や改善の必要性を検討し、新たな選抜区分の導入が必要かどうかについての示唆を得ることを目的とした。

具体的には、3 つの資料を分析する。まず、客観的事実として入学者選抜の実施結果（志願者数、合格者数）を取り上げた。対象期間は、大学入学共通テスト

が開始された令和 3 年度入試から令和 6 年度入試までの 4 年間とした。ただし、選抜区分は、総合型選抜のAO入試Ⅱ期とⅢ期¹⁾、一般選抜前期日程と後期日程とし、定員が若干名もしくは少数の特別選抜は除外した。

また、合格者（入学者）の志望動機を探るために、毎年実施している新入学者を対象にしたアンケート（宮本ほか、2022）のデータを活用し、いくつかの質問項目を分析した。さらに、入学後の学修状況を検証するために、卒業までの累積 GPA を分析に用いた。

2 入学者選抜の実施状況

2.1 志願者及び合格者の属性

表 1 に各年度における男女別の志願者及び合格者の人数と割合を示した。志願者における女子比率は、緩やかな増加傾向にあり、令和 6 年度には 30%を超えた。合格者の女子比率も志願者と同様の傾向を示し、志願者の増加が合格者にも反映されていることがうかがえる。

志願者及び合格者の属性として、ここではとくに入学者選抜に関連すると考えられる出身地域と現役・浪人別の 2 つに着目する。出身地域については、人数規模を考慮し、北海道、東北、関東、中部、その他（近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外）の 5 つに分類した。

まず、志願者の出身地域別の女子比率（表 2）をみると、いずれの地域においても、全体（表 1）と同様に増加傾向にある。ただし、北海道は人数が少ないため、他の地域と比較して女子比率の変動幅が大きい。東北地方では、すべての年度で女子比率が最も高く、令和 4 年度以降は 36%を上回っている。一方、中部地方、関東地方、その他の地域ではいずれも全体の女子比率を下回っており、とりわけ関東地方とその他の地域は相対的に女子比率が低い水準で推移している。合格者における女子比率をみると、地域別の割合はおおむね志願者の女子比率に対応しているが、中部地方では若干上回る傾向にあり、全体並みの割合となっている。

志願者における出身地域の構成比を図 1 に示した。男女ともに年度によって構成比に著しい変動はみられなかった。男子では関東地方がもっとも多く、次いで東北地方であったが、対照的に、女子では東北地方がもっとも多く、次いで関東地方であった。他の地域については男女でほぼ同程度であった。また、合格者における出身地域の構成比をみると（図 2）、男女ともに中部地方の割合が若干増えている以外は、志願者の

表 1 各年度の男女別志願者及び合格者の人数（人）と割合（%）

			R3	R4	R5	R6
志願者	男子	人数	5,650	5,407	5,208	5,582
		%	73.2	73.0	70.5	69.9
	女子	人数	2,070	1,999	2,178	2,400
		%	26.8	27.0	29.5	30.1
	合計人数		7,720	7,406	7,386	7,982
合格者	男子	人数	1,786	1,803	1,759	1,767
		%	72.1	72.7	70.9	70.0
	女子	人数	690	678	723	756
		%	27.9	27.3	29.1	30.0
	合計人数		2,476	2,481	2,482	2,523

注）特別選抜は除く

表 2 各年度の出身地域別の志願者及び合格者における女子の人数（人）と割合（%）

			R3	R4	R5	R6
志願者	北海道	人数	51	46	47	77
		%	29.5	31.1	25.8	36.7
	東北	人数	964	965	1,001	1,025
		%	34.2	36.0	36.9	37.6
	関東	人数	673	611	702	854
		%	22.6	20.5	24.4	25.9
	中部	人数	260	258	268	271
		%	24.5	25.8	27.8	26.3
	その他	人数	122	119	160	173
		%	17.6	20.0	24.4	24.3
合格者	北海道	人数	17	18	23	30
		%	23.6	30.0	28.0	33.0
	東北	人数	315	321	306	299
		%	36.6	35.9	37.0	36.6
	関東	人数	215	201	218	263
		%	22.6	21.2	22.2	25.7
	中部	人数	106	104	131	116
		%	26.7	26.9	31.6	30.0
	その他	人数	37	34	45	48
		%	19.0	17.6	25.3	23.4

構成比とおおむね同様の傾向であった。

次に、志願者及び合格者における現役生比率をみると（表 3）、両者ともに全体では 7 割以上が現役生であり、増加傾向にあった。男女別にみても増加傾向にあったが、4 年間一貫して女子の方が男子よりも高く、約 8 割にのぼった。

2.2 選抜区分別の分析

男女別に志願者及び合格者に占める各選抜区分の構成比を算出した。性別にかかわらず志願者（図 3）、合格者（図 4）ともに選抜区分の構成比は 4 年間を通してほぼ同程度であった。また、男女を比較すると、

東北大学の入学者選抜における男女差の様相

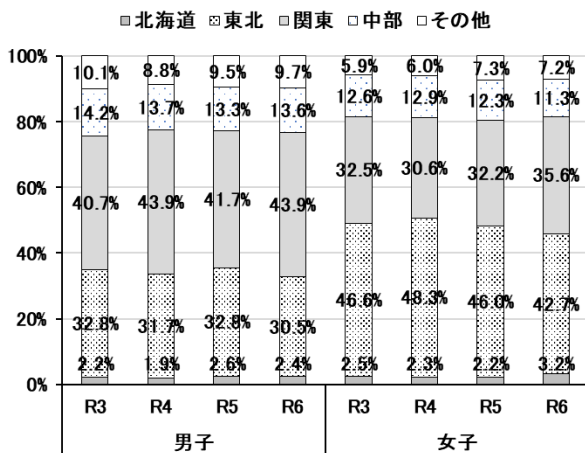


図1 志願者における男女別の出身地域の構成比

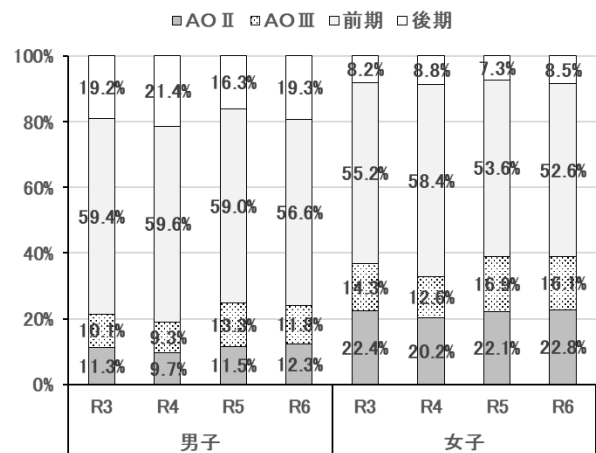


図3 志願者における男女別の選抜区分の構成比

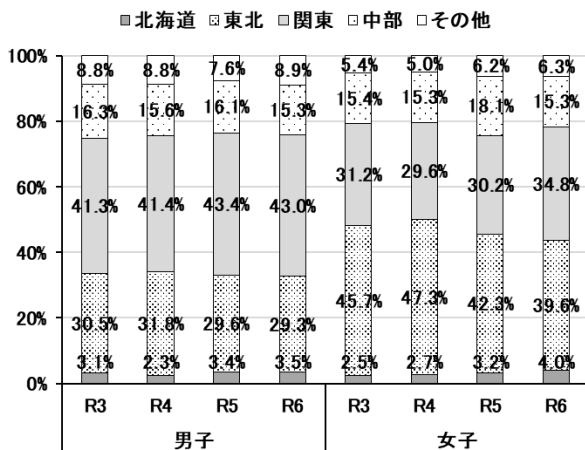


図2 合格者における男女別の出身地域の構成比

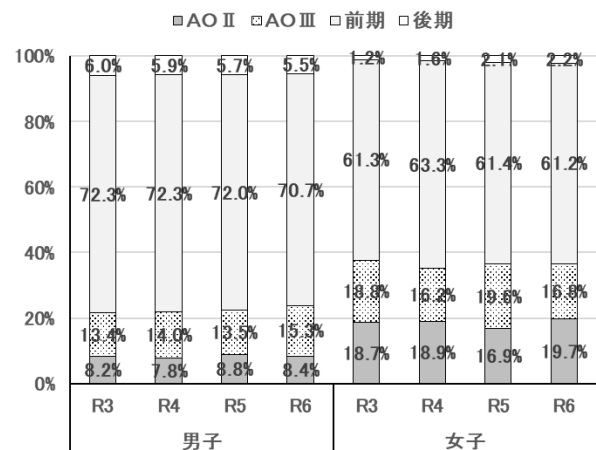


図4 合格者における男女別の選抜区分の構成比

表3 志願者及び合格者
における男女別の現役生比率 (%)

		R3	R4	R5	R6
志願者	男子	72.1	73.1	73.2	75.9
	女子	78.2	80.2	80.6	81.8
	全体	73.6	74.8	75.2	77.5
合格者	男子	71.6	73.3	75.3	77.5
	女子	78.8	79.8	82.5	83.0
	全体	73.5	74.9	77.3	79.0

志願者、合格者ともに女子の方が男子よりも、AO II、AO IIIの占める割合が多く、前期、後期の占める割合が少なかった。

次に、選抜区分ごとに志願者、合格者における女子比率を算出した（図5）。志願者、合格者ともに4年間で著しい変動はみられなかった。志願者では、すべての年度でAO IIの割合が最も高く（平均 43.7%）、

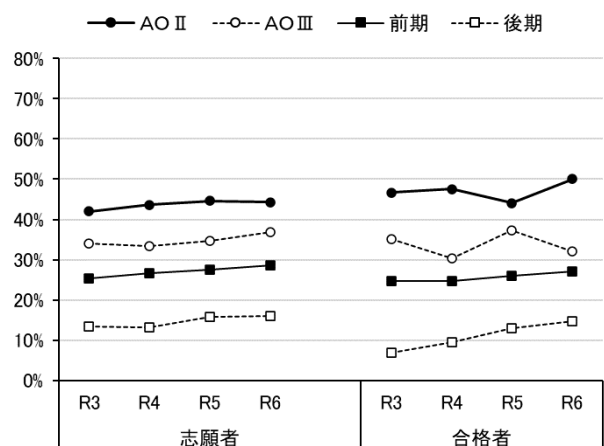


図5 選抜区分別の志願者及び合格者における女子比率 (%)

次いで、AO III（平均 34.9%）、前期（平均

27.0%)，後期（平均 14.6%）の順であった。また，合格者では，各選抜区分の順位自体は志願者と同じであった。AOⅡは，志願者での割合よりも総じて上回り，とくに令和 6 年度は 50.0%にのぼった。AOⅢは毎年 5%程度の幅で高下がみられた。前期，後期はともにすべての年度において志願者での割合を下回った。

2.3 学部系統別の分析

学部の系統による違いをみるために，10 学部を大きく文系（文学部，教育学部，法学部，経済学部文系），理系（経済学部理系，理学部，薬学部，工学部，農学部），医療系（医学部，歯学部）の 3 つに分けた。なお，一般選抜後期日程は，実施学部が経済学部と理学部のみであること，定員がAOⅡ，AOⅢ，前期に比べて少なく，志願者倍率が著しく高いこと等，特殊事情を考慮して今後の分析から除外することとした。

図 6～図 8 は，各学部系統において選抜区分ごとに志願者，合格者の女子比率を示したものである。まず，文系学部をみると（図 6），志願者ではAOⅡが 6 割を超え（平均 63.8%），AOⅢ（平均 39.1%），前期（平均 35.6%）よりも著しく高かった。合格者ではAOⅡは 7 割（平均 74.9%）を超えたが，AOⅢ（平均 38.0%），前期（平均 36.2%）は志願者での割合と同程度あった。

次に，理系学部をみると（図 7），志願者ではAOⅡ（平均 30.0%）が最も高かったが，AOⅢ（平均 27.0%）も同程度あった。前期（平均 18.3%）はそれらより低かった。合格者でも，AOⅡ（平均 31.8%），AOⅢ（平均 24.3%），前期（平均 15.1%）の順であったが，志願者での割合よりもAOⅡは高かったが，AOⅢ，前期は低かった。

また，医療系学部をみると（図 8），志願者ではAOⅡ（平均 61.4%），AOⅢ（平均 52.9%），前期（平均 46.1%）の順であり，いずれも比較的高い割合であった。合格者でもAOⅡ（平均 67.5%），AOⅢ（平均 61.4%），前期（平均 47.9%）の順であるが，いずれも，志願者での割合よりも高い。

以上，学部系統それぞれで固有の特徴がみられた。それらをより明確にするために，男女別に各選抜区分の合格率を算出し，両者の差を求めた（図 9）。総じて，文系学部では女子のAOⅡの合格率が男子よりも高く，理系学部では女子のAOⅢ，前期の合格率が男子よりも低く，医療系学部ではほぼすべての選抜区分で女子の合格率が男子よりも高かった。

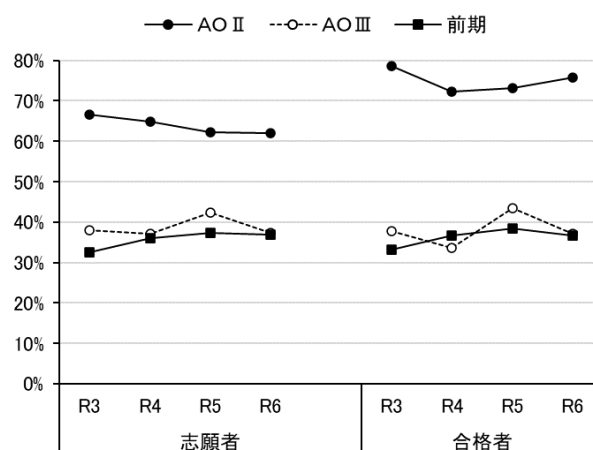


図 6 文系学部における選抜区分別の志願者及び合格者の女子比率

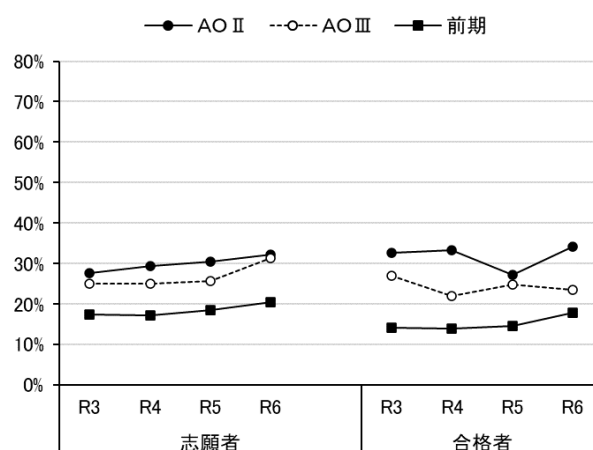


図 7 理系学部における選抜区分別の志願者及び合格者の女子比率

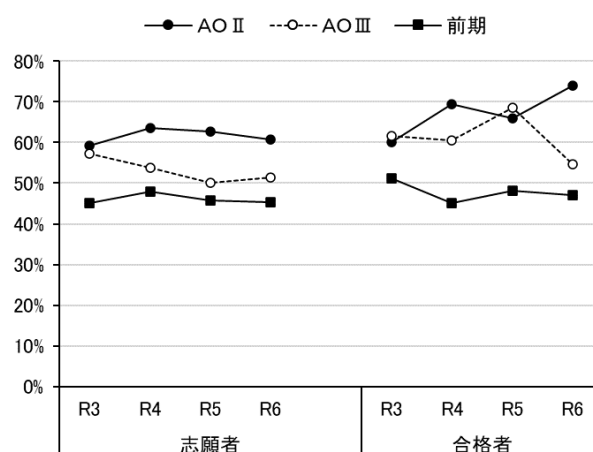


図 8 医療系学部における選抜区分別の志願者及び合格者の女子比率

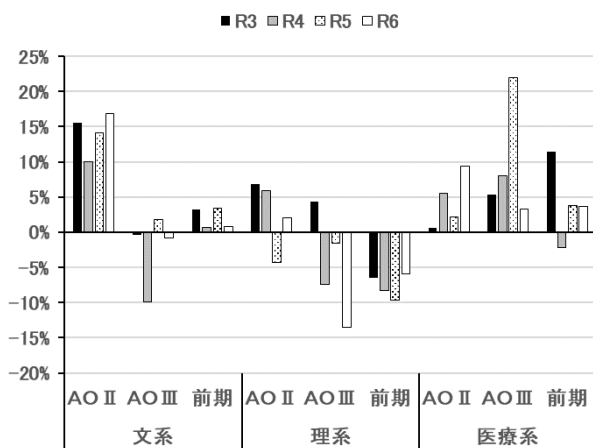


図9 各学部分類における選抜区分別の合格率(%)の男女差(女子の合格率－男子の合格率)

表4 入学した学部等が第1志望の割合(%)

		R3	R4	R5
文系	男子	94.8	94.3	94.3
	女子	91.2	93.7	93.9
理系	男子	89.6	89.5	88.4
	女子	86.9	86.7	92.9
医療系	男子	92.5	87.8	84.1
	女子	77.3	72.5	83.3

3 志望動機分析

志望動機に関する男女差を探るために、ここでは、東北大学で毎年実施している新入学者を対象にしたアンケート(詳しくは、宮本ほか、2022)から、2つの質問の結果を利用した。1つは、入学した学部等が第1志望であるかどうかを問う質問である。ただし、AOⅡ、AOⅢでは第1志望であることが出願要件となっているため、前期で入学した学生のみを対象にした。

もう1つは、オープンキャンパスに関する質問であり、具体的には参加の有無、参加した学部等、入学した学部等の志望決定への影響度を尋ねた。志望決定への影響度については、「オープンキャンパスへの参加は、あなたが入学した学部(学科)への志望の決定にどの程度の意味がありましたか?」と尋ね、「決め手となった」、「参考になった」、「あまり関係がなかった」、「全く無関係」の4つの選択肢から回答を求めた。このうち、「決め手となった」を選択した者の割合について分析を行った。これまで、オープンキャンパス参加が入学した学部等の志望決定にあたって重要であることが示されてきた(倉元ほか、2020)。しかしながら、男女差についての分析は行われてこな

かった。なお、令和6年度入学者対象のアンケートは、現時点では回収が終了していないため、令和3年度から令和5年度のデータだけを分析した。

3.1 第1志望者の割合

表4は、前期で入学した学生を対象に、学部系統別に入学した学部等が第1志望である者の割合を示したものである。文系学部及び理系学部ではいずれの年度においても男女ともに約9割が第1志望であり、男女差は5%以内で収まっていた。一方、医療系では、令和3年度、4年度は男子が9割弱であったが、女子は7割台にとどまっていた。令和5年度には男女ともに8割強となり、男女差が縮小する傾向がみられた。

3.2 オープンキャンパス参加の影響

東北大学では、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、令和2年度及び令和3年度のオープンキャンパスをオンライン形式で実施した。また、令和4年度はオンライン形式を継続しつつ、参加者を制限して対面形式による実施を再開した。このため、令和3年度から令和5年度の入学者のオープンキャンパスの参加経験は、①対面のみ経験者、②対面とオンラインの両方の経験者、③オンラインのみ経験者の3つのタイプに分類される。図10は、各年度における参加経験者のタイプごとの男女別の割合を示したものである。令和3・4年度の対面のみ経験者の割合は男子の方が若干高かったが、それ以外のタイプでは女子比率が高い傾向がみられた。また、対面のみ経験者の割合は年度を追うごとに減少し、オンラインのみ経験者の割合は増加傾向を示した。

オープンキャンパスが志望決定に与えた影響については、対面のみ経験者及び両方の経験者に対して対面オープンキャンパスについて尋ね、オンラインのみ経験者及び両方の経験者に対してオンラインオープンキャンパスについて尋ねた。それぞれ選抜区分・男女別に「決め手となった」と回答した者の割合を求めた。その結果、対面オープンキャンパスに関しては、図11に示す通り、令和3年度の前期以外のすべての年度及び選抜区分において、女子の割合が男子よりも高かった。いずれの年度においても女子ではほぼAOⅡ、AOⅢ、前期の順で高かった。男子では、AOⅡが他の選抜区分よりも高かった。オンラインオープンキャンパスに関しては、図12に示す通り、全体的に「決め手となった」と回答した割合が対面よりも低く、また、男女差にも一貫した傾向はみられなかった。

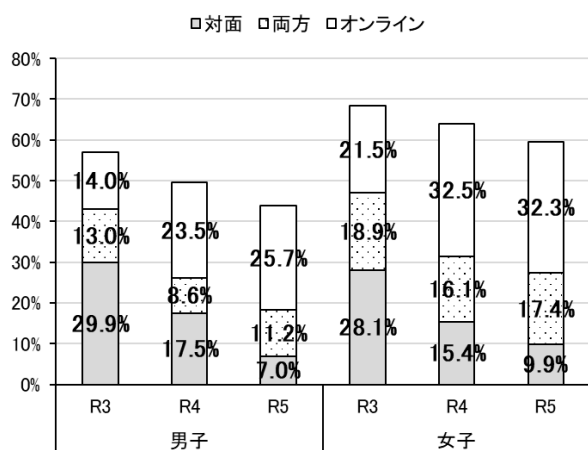


図 10 各年度におけるオープンキャンパスの参加経験者のタイプごとの男女別の割合

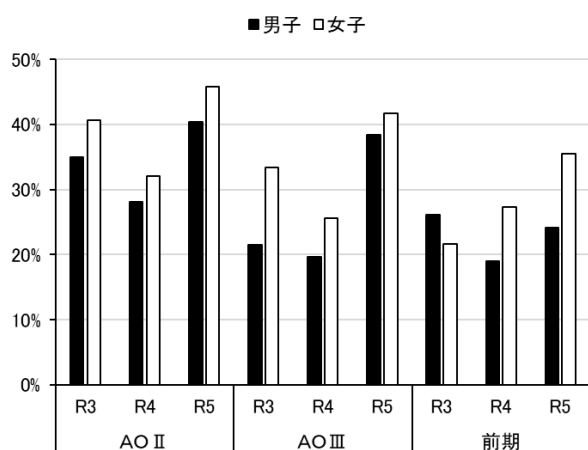


図 11 対面オープンキャンパスが志望決定の「決め手となった」回答者の選抜区分・男女別の割合

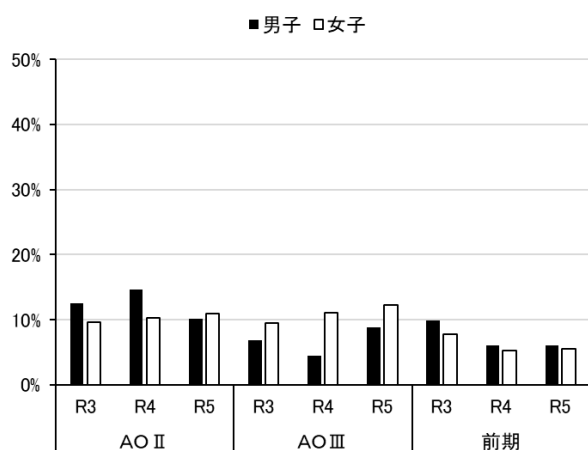


図 12 オンラインオープンキャンパスが志望決定の「決め手となった」回答者の選抜区分・男女別の割合

表 5 各学部系統における選抜区分・男女別の累積 GPA (R3 及び R4 卒業生)

			R3卒業生			R4卒業生		
			AOⅡ	AOⅢ	前期	AOⅡ	AOⅢ	前期
文系	男子	M	2.64	2.53	2.44	2.56	2.84	2.67
		SD	0.59	0.63	0.64	0.43	0.45	0.51
	女子	M	3.11	2.91	2.75	2.94	2.82	2.95
		SD	0.34	0.54	0.56	0.48	0.51	0.45
理系	男子	M	2.72	2.76	2.60	2.91	2.86	2.73
		SD	0.55	0.54	0.59	0.48	0.48	0.48
	女子	M	2.83	3.00	2.69	3.05	2.99	2.85
		SD	0.48	0.54	0.53	0.41	0.51	0.48
医療系	男子	M		2.63	2.34		2.75	2.54
		SD		0.59	0.49		0.45	0.54
	女子	M		3.04	2.83		3.11	2.90
		SD		0.38	0.46		0.31	0.41

注) M: 平均値, SD: 標準偏差

4 入学後の学修状況

選抜区分別の入学後の学修状況については、標準年限で卒業した者の累積 GPA を算出した結果、AOⅡ及びAOⅢの学生が前期の学生よりも高いことが公表されてきた（滝澤、2022 年 2 月 10 日）。ここでは、同様のデータを用いて、これまで検討されてこなかった男女差の分析を試みた。ただし、本研究の分析対象者のうちもっとも早く入学した者でも令和 3 年度入学であり、現時点で卒業には至っていない。このため、データが整備されている、令和 3 年度及び令和 4 年度に標準年限で卒業した者の累積 GPA を分析することとした。

なお、医学部医学科、歯学部、及び、薬学部薬学科は、6 年間の課程であるため、それ以外の者よりも入学年度が 2 年早い。また、医療系の学部（医学部、歯学部）においては、AOⅡが平成 30 年度入試から導入されたことから、令和 3 年度及び 4 年度卒業生のデータは、4 年間の課程である医学部保健学科看護学専攻のみだけである。このうち、男子学生が令和 3 年度は 1 名、令和 4 年度は 0 名であったため、分析から除外した。結果の解釈に際しては、こうしたサンプルの状況に留意する必要があるが、男女差を探る上での参考資料にはなると考えられる。

表 5 は、学部系統ごとに選抜区分・男女別による累積 GPA の平均値と標準偏差を示したものである。

令和 4 年度文系のAOⅢを除くすべての学部を選抜区分で、女子の方が男子よりも卒業までの累積 GPA は高かった。

5 考察

本研究では、東北大学の入学者選抜に関する各種資料を男女差の観点からあらためて分析し、既存の選抜区分が女子比率にどのように寄与しているかを探った。

令和 3 年度から令和 6 年度までの志願者及び合格者の全体的な状況を分析した結果、志願者及び合格者における女子比率は緩やかな増加傾向を示し、令和 6 年度にはともに 30%を超えた。このことから、既存の入試制度が女子比率を維持・増加させる上で一定の機能を果たしていることが示唆された。

女子の志願者層の特徴として、まず、出身地域についてみると、女子の約 4 割が東北地方出身であり、約 3 割が関東地方出身であった。一方、男子では東北地方が約 3 割、関東地方が約 4 割を占めていた。また、選抜区分に関しては、女子は男子に比べて総じてAOⅡ及びAOⅢに志願する者が多く、合格する者の割合も高かった。

これらの結果を踏まえると、出身地域と選抜区分との間に何らかの関連がある可能性も考えられる。この可能性を検討するために、選抜区分及び男女別に出身地域の構成比を集計した。本研究におけるこれまでの分析から、志願者と合格者の構成比に大きな違いがみられず、また、年度ごとの変動も小さいため、令和 3 年度から令和 6 年度の志願者データを併合して集計した。その結果、表 6 に示す通り、女子においてはAOⅡ、AOⅢ、前期では東北地方の割合が高い。一方、男子においては、AOⅡでは東北地方、AOⅢ、前期では関東地方の割合がそれぞれ高い。

以上から、とくにAOⅡとAOⅢは、東北地方の女子に対して強い訴求力をもっていることが示唆される。このことが、本学における女子比率の維持・増加に寄与してきたと考えられる。では、なぜ女子、とくに東北地方の女子にとって、AOⅡとAOⅢは訴求力が高いのであろうか。

女子に限らず東北地方の高校生にとって、東北大学は「あこがれの大学」であり、比較的早い時期から第 1 志望となる傾向がある。加えて、女子の方が男子よりも地元志向が強いとされる。このため、「合格したら必ず入学することを確約できる者」を出願要件とするAOⅡとAOⅢは、女子、とりわけ東北地方の女子と高い親和性を持つと考えられる。また、AOⅡでは筆記試験、AOⅢでは大学入学共通テストを課してお

表 6 選抜区分・男女別の出身地域の構成比 (%)

		北海道	東北	関東	中部	その他
AOⅡ	男子	2.5	55.2	26.2	8.5	7.5
	女子	2.4	60.9	24.3	6.5	5.9
AOⅢ	男子	2.3	37.7	40.4	12.9	6.8
	女子	2.1	44.4	35.5	11.6	6.4
前期	男子	2.5	32.1	42.7	14.4	8.4
	女子	2.9	43.5	32.5	14.5	6.5
後期	男子	1.5	14.4	53.0	15.2	15.9
	女子	1.1	22.4	53.0	13.3	10.2

り、一般選抜の準備と重なる部分が多い。そのため、これらの選抜区分は志望学部等を受験する機会を複数回提供するものとして受け止められている。このことから、現役志向が強いとされる女子にとって、AOⅡやAOⅢが選択肢として受け入れられやすいと考えられる。伊佐（2021）は、難関大への進学者において女子が男子に比べて少ない一因として、女子の浪人選択率の低さを指摘している。表 3 で示した通り、女子の方が男子よりも現役生の割合が高いことは、女子のこうした志向とも整合すると考えられる。

以上は、あくまで推測の段階にとどまるものである。AOⅡとAOⅢが、今後も女子比率の維持・向上に寄与するためには、その訴求力の強さのメカニズムを解明することは重要な課題である。

現状の選抜区分における課題として、理系学部のAOⅢ及び前期において女子の合格率が男子よりも低い点があげられる。AOⅢでは大学入学共通テストが課され、前期では加えて個別学力試験が課されるため、これらを構成する教科・科目に関する学力の問題が影響している可能性がある。しかしながら、女子が理系系の教科・科目が不得意とするという単純な話ではない。学力的な側面を独自の筆記試験で評価するAOⅡでは、理系学部においても女子の合格率が総じて高い。従来から、女子は志望時期が早いことが示されており（北澤ほか、2012；藤井、2017）、より学力の高い層がAOⅡを志願し、合格した可能性も考えられる。

女子が本学を志望する要因として、オープンキャンパスへの参加が影響を与えている可能性が示唆された。実施形式（対面、オンライン）を総合すると、女子の方が男子よりもオープンキャンパスへの参加率は高かった。とくに、AOⅡ、AOⅢで入学した者にとっては、対面オープンキャンパスの参加が、入学した学部等の志望決定の「決め手」となる傾向が認められた。一方、コロナ禍により対面での参加機会が制限された

中、オンラインオープンキャンパスはその代替手段として機能したが、志望決定への影響は小さく、男女間で顕著な差はみられなかった。宮本ほか（2022）の研究では、受験理由の自由記述に基づくテキストマイニングの結果から、女子が対面オープンキャンパスを通じて東北大学の魅力を感じ、自分の興味にあった学びができることを重視しているという仮説が生成されている。本研究の結果は、その仮説を一定程度支持するものといえる。また、対面オープンキャンパスの地理的な参加しやすさが、AOⅡおよびAOⅢにおける東北地方出身女子の割合の高さに影響している可能性も考えられる。

ただし、対面オープンキャンパスの志望決定の影響力を過剰に評価するのを避けるべきである。図 10 で示したように、対面オープンキャンパスの参加率が減少しているにもかかわらず、表 2 で示される女子の志願者数は増加している。対面オープンキャンパスの参加経験はあくまで 1 つの要因に過ぎず、他にも女子の志望決定を促す要因があると考えられる。これらの要因を明らかにすることが、今後の課題である。

入学後の学修状況については、参考資料の分析結果ではあるが、選抜区分にかかわらず、全体的に女子の方が男子よりも卒業までの累積 GPA は高いことがうかがえた。このことから、既存の選抜制度が優秀な女子学生の確保につながっている可能性があることが推察される。今後、入学後の学修状況をさらに検証するために追跡調査を継続するとともに、女子の学修状況が男子よりも良好である原因の解明も必要である。

以上、本学においては、AOⅡ及びAOⅢが女子比率の維持・向上に寄与してきた。選抜区分にかかわらず、女子の大学での学修状況も良好である。したがって、「女子枠」といった新たな選抜区分を導入することは急務ではないと考えられる。現状の制度を一層改善することが重要であろう。例えば、女子比率を高めるためには、一般選抜の志願者、とくに理系学部において増やすことが必要であろう。そのための方策の 1 つとして、対面オープンキャンパスへの参加を促すことが有効であると考えられる。

なお、今回の分析では探索的であったため、いくつかの課題が残った。とくに、学部の系統分けにおいて、医学部医学科、医学部保健学科、歯学部を同じ医療系とした点はやや不適切であった。女子が将来、医師・歯科医師を目指す場合と、それ以外の医療職を目指す場合では、進学先の選択方略が異なること（伊佐, 2021）が示唆されている。この点を含め、上記した諸課題についてさらに精査していく必要がある。

注

- 1) 東北大学のアドミッション・ポリシーでは、総合型選抜における学力については、一般選抜と同等以上の水準を求めている。AO入試Ⅱ期（11 月）では個別の筆記試験、AO入試Ⅲ期（2 月）では大学入学共通テストと個別の筆記試験（一部の学部等）を課している。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP23K20711, JP21H04409 の助成を受けたものである。

参考文献

- 藤井恒人（2017）. 「志望大学の認知、志願確定と情報収集時期、方法の関係—入学者アンケート分析より—」 『大学入試研究ジャーナル』 **27**, 103-108.
- 伊佐夏実（2021）. 「難関大に進学する女子はなぜ少ないのか—難関高校出身者に焦点をあてたジェンダーによる進路分化のメカニズム」 『教育社会学研究』 **109**, 5-27.
- 北澤武・渡辺美紀・上野淳（2012）. 「一般入試選抜を対象とした入学志願者の傾向分析—過去3年間の入学志願者アンケート調査分析から—」 『大学入試研究ジャーナル』 **12**, 163-171.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・南紅玉（2020）. 「東北大学における入試広報活動の『これまで』と『これから』—頂点への軌跡からオンライン展開への挑戦へ—」 『教育情報学研究』 **19**, 55-69.
- 宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸（2022）. 「東北大学志望を促進する要因の検討—新入学者アンケートから—」 『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 69-76.
- 文部科学省（2022年6月3日）. 「令和5年度大学入学者選抜実施要項」 文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt_daigakuc02-000010813_1.pdf（2024年4月25日）
- 滝澤博胤（2022年2月10日）. 「AO入学者の学業成績がいまい理由」 朝日新聞 Adua
<https://www.asahi.com/edua/article/14543703>（2024年4月25日）
- 東北大学（2022）. 国立大学法人東北大学 第4期中期目標・中期計画」 東北大学
<https://www.bureau.tohoku.ac.jp/kohyo/kicho/itiran2022.pdf>（2024年4月25日）